

名詞述語文「AのがBだ」における焦点句の位置

和気圭子

要 旨

従来、「が」を用いた名詞述語文は、「が」の前に焦点句があるとされてきたが、近年、「が」の後に焦点句がある文（後項焦点文）また文全体が焦点句である文（全体焦点文）も存在することが指摘されている。本稿では、「の」による節を主格名詞とする「AのがBだ」という形式の文を考察対象とし、そのうち、どのような構造の文が前項焦点文、あるいは後項焦点文と解釈されやすいのか、文の構造と焦点の位置との関係について考察を行う。

A節中の述語が動詞である「AのがBだ」文は、A節中の述語とB項の間に(1)格関係が再現できるタイプ、(2)格関係が再現できないタイプ、の2種に分けることができる。このうち、(1)のタイプは後項焦点文としての解釈をうけやすく、(2)のタイプは前項焦点文として解釈されやすい。これらの解釈の受けやすさは、文脈・状況に依存するのではなく、構造的な要因によって説明することが可能である。

【キーワード】 名詞述語文 「AのがBだ」 後項焦点文 格関係の再現

On the Focus in Nominal Predicate Sentences "A no ga B da"

Waki, Keiko

It has been argued that in a nominal predicate sentence with the particle *ga*, *ga* is a focus marker and the focus is on the phrase preceding *ga*. However, recently it has been pointed out that the focus can not fall only on the phrase preceding *ga*, but also on the phrase following *ga* or even on the whole sentence.

This paper examines the relationship between sentence structure and focus in nominal predicate sentences of the structure "A no ga B da", i.e. sentences nominalized by *no* clauses as subject.

When A is a verbal predicate clause, "A no ga B da" sentences can be classified into two types, 1), where a case relationship between the predicate verb in clause A and noun B can be posited, 2), where it cannot be posited. In type 1 sentences, the focus tends to fall on the phrase following *ga*. In a type 2 sentences, on the other hand, the focus tends to fall on the phrase before *ga*. This tendency can be explained by sentence structure rather than discourse structure or situational factors.

1. はじめに

「が」を用いた「AがBだ」という形の名詞述語文については従来、Bであるものは何かということ、それはAだ といった意味を表す、とされてきた。だが中には、Aであるものは何かということ、それはBだ といった意味を表す場合がある。天野(1998)は「前提・焦点」の概念を再規定した上で、「AがBだ」文には、従來說明されてきたように Bであるものは何かということ、それはAだ といった意味を表す、つまり「～が」が焦点句であるもの(前項焦点文)の他に、Aであるものは何かということ、それはBだ といった意味を表す「B」が焦点であるもの(後項焦点文)、そして文全体が焦点であるもの(全体焦点文)が存在することを指摘している。そして、「が」それ自体は文のどこに焦点句があるかを示しておらず、焦点句の位置は文脈・状況によって明らかになる、と述べている。

しかし、焦点句の位置は、まったく文脈・状況に依存するのだろうか。文の構造そのものによって前項焦点文、あるいは後項焦点文と解釈されやすい文があるのではないか。本稿ではこの観点から、「が」による名詞述語文のうち、「の」による節を主格名詞とする「AのがBだ」という形式の文、中でもA節中の述語が動詞である文を考察対象とし、文の構造と焦点句の位置について検討する。

2. 「AのがBだ」文の2つのタイプ

砂川(1995)では、「AノガBダ」文について、この文のB項は無格であることに加え、副詞などによる連用修飾句や接続助詞などによる従属節も用いられず、文法的な関係を持たない「裸の」名詞句といえることが指摘されている。また、B項にはA項との格関係が再現できるタイプと、できないタイプがあることが述べられている。(1)は格関係が再現できる例、(2)は再現できない例である。

(1) a 左下に見えてまいりましたのがニューヨーク港名物の自由の女神像でございます。(『ブ
ンとブン』)

b ニューヨーク港名物の自由の女神像が左下に見えてまいりました。

(2) a 厳選されたワインを出すのがこの店の特徴です。

b この店の特徴{ *が / *を / *で } 厳選されたワインを出します。

(砂川(1995)による)

(2)のような文では、「AのがBだ」のB項とA節中の述語との間に、「～ことだ」という提題化なしに格関係を認めることができない。

本稿ではA節中の述語が動詞であるもののみを考察対象とするが、この場合、提題化なしに格関係が再現できるかどうかは、B項とA節中の動詞の関係のありかたによって決まってくる。格関係が再現できるのは以下に見ていくように、かなり限定された場合である。

2.1 格関係が再現できるための条件

2つの名詞句による「[名詞]が[名詞]だ」という文においては、どちらかが主格名詞でもう一方は述語であり、主格名詞は「が」によってマークされ、述語は格助詞を取ることができない。節が主語になっている「AのがBだ」文においても同じことが言え、熊本(1989a)、砂川(1995)が指摘しているように、「AのがBだ」のB項は無格である。

そのため、B項の名詞句はA節中の動詞と格関係を持つことのできる意味の名詞句であっても、その格関係は格助詞の助けなしに理解されなければならない。ある名詞句について、格助詞がなくても述語動詞との格関係を認めることができるのは、格助詞がその名詞句の意味役割を表示しているのではない場合である。たとえば[起点]の「から」格名詞句は、「から」なしには[起点]という意味役割の解釈ができない。「から」という格助詞そのものが[起点]という意味役割を示しているためである。

(3)* アメリカ横断の旅をしたのがサンフランシスコだった。

(3)のように、格助詞「から」なしでは、「サンフランシスコから」という[起点]の解釈をすることが難しく、この文のみでは非文となる。

(4)この五月、精鋭の第十一軍が、長沙、衡陽、桂林、柳州をめざして出撃したのがこの岳州であった。(『楡家の人びと』)

(4)は実例であるが、(3)と同じく単文としては解釈が難しい。これは、次のような文脈に置かれ、先行する「そこから」という語の助けを借りてはじめて[起点]の解釈が可能となる。

(4)'岳州まで貨車で行き、そこからいよいよ行軍が始まった。この五月、精鋭の第十一軍が、長沙、衡陽、桂林、柳州をめざして出撃したのがこの岳州であった。

一方「が」格名詞句は、「が」によって意味役割が表示されているわけではない。「が」はその名詞句が構文的に最も優位に立つメンバーであるということを意味しているのであり、「が」格名詞句の意味役割は、名詞句と述語動詞との関係によって決まってくる。つまりこの場合、助詞「が」がなくても、その名詞句の意味解釈をすることは可能である。

(5)左下に見えてまいりましたのがニューヨーク港名物の自由の女神像でございます。(『ブンとフン』)

「が」格名詞句のように、「AのがBだ」文のB項におかれ、A節中の述語動詞に関わる意味解釈をされることが可能なのは、以下のような成分である。

- a) 「が」格名詞句、「を」格名詞句、「に」格名詞句⁽¹⁾
- b) [対称]の「と」格名詞句
- c) 時を表す成分、場所の「で」格名詞句

a)の「が」、「を」、「に」格というのは、基本的に文の構造に関わる格助詞であり、それら自身に意味役割を表示する機能はない。(6)が「を」格、(7)が「に」格の例である。

(6) 軽くてうまくて、栄養価値があるものとして考えたのが、揚げ饅頭であり、乾し小魚であり、バターであり、甘納豆であった。(『孤高の人』)

(7) これに反し、予想以上に悩まされたのが英語であった。(『若き数学者のアメリカ』)

b)の[対称]の「と」は、「結婚する」「けんかする」といった動詞の表す事象において、主格と同じレベルで事象に参加するメンバーにつく。「と」格名詞句そのものは文の構造上は必須ではないのだが、「結婚する」「けんかする」をいった動詞が複数の事象参加者を要求するために、「が」格名詞句と同等の位置づけが与えられる。

(8)において、「結婚する」という動詞は「太郎」ともうひとりのメンバーを要求し、「花子」はそのメンバーとして解釈される。

(8) 太郎が結婚したのが花子だ。

c)は時、場所(事象の起こる場所)をあらわすもので、事象全体の場面を設定する要素として格表示なしでも理解される。格関係ではないが、時の成分も場所の「で」と同じく事象全体の場面を設定する要素であり、同列に扱うことができると考える。以下(9)は場所の「で」、(10)(11)は時の成分の例である。

(9) こしのすずがリリンリリンと、足をかわすごとになりつづけ、やがて、リッ、となりやんだのが、大石先生の家の縁先である。(『二十四の瞳』)

(10) きのう床についたのが朝の四時。(『二十歳の原点』)

(11) 結局、なんとか手紙を書きあげたのが十月中旬すぎであった。(『冬の旅』)

以上から、格関係が再現できるタイプの「AのがBだ」文のB項名詞句と、A節中の動詞によって

表される 事象 A との関係は、次の (12) あるいは (13) のような関係に限られる。

(12) B項の名詞句が 事象 A の中でその事象を構成するメンバーとして働いている。

(13) B項の名詞句が 事象 A 全体の場面を設定する要素となっている。

以下は、(12)(13) にあてはまらない「AのがBだ」文で、格関係が再現できない例である。

(14) 親友に誘われたのがきっかけでした。

(15) 温泉につかって休養するのが目的ではない。(『人民は弱し 官吏は強し』)

(16) 自分で病気に罹っていながら、気が付かないで平気であるのがあの病の特色です。(『ころ』)

これらの「AのがBだ」文のB項の名詞句は、A節の述語動詞とは格関係を持たず、その動詞が表す事象に直接の関わりを持たない。B項の名詞句は、事象Aの内部で働くメンバーではなく、その外側のものである。そして、A節の動詞が表す事象全体について、それがどのような性質・性格のものかを述べているのであり、名詞句としてAの名詞節と対等な位置にあるととらえられる。名詞文としては典型的な、属性を叙述する文だといえよう。

砂川(1995)で述べられているように、「AのがBだ」文は、A節の述語とB項の間に格関係が再現できるタイプと、できないタイプの2種に分類することができる。ここでは、2つのタイプの文がA節の述語とB項の関係においてどのように異なるのか、その差異について明らかにした。A節の述語が動詞である場合、2つのタイプの違いは、主に、B項名詞句が事象Aにとって、構造的に必須であるかどうかという点に表れてくる。なお、(13)のような、B項が事象の場面設定に関わる要素である場合に、必須性が低いにも関わらず、格関係が再現できることの理由については、今後の課題としたい。

3. 「AがBだ」文の2つのタイプと焦点句の位置

これら2つのタイプの「AがBだ」文と、焦点句の位置には、どのような関係が見られるのだろうか。以下、採集した実例をもとに分析、検討する。

「焦点」の概念、及び、焦点句の位置の判定については、天野(1998)に従って分析をすすめる。次の(17)は「前提・焦点」の規定である。

(17)ある文、例えば、「AがBだ」文や「AはBだ」文の解釈に際して、聞き手に了解されると仮定された、変項Xを含む命題 AがXだ または XがBだ が「前提」であり、そのXと項がイコールで結ばれる命題 $X = B$ または $X = A$ が「焦点」である。

ある文において、前提を構成する要素を「前提句」、焦点を構成する要素を「焦点句」と呼ぶ。(天野(1998) p.68)

焦点句の判定について、天野(1998)では、ある文が「が」の後に焦点句を持つ場合に、それを示す根拠として次の2点があげられている。

「例えば」が共起しうる場合、その例として述べられている要素が「が」に前置(前項焦点文)せずに、後置する(後項焦点文)。

「何だと思う?」という句を「が」の後に挿入できる(後項焦点文)(前項焦点文はできない)(天野(1998) p.70)

また、後項焦点文と全体焦点文の差異は、「例えば」が共起した場合の解釈のちがいに示される、とあるが、実例にあたりと判別しがたいものがあり、先のほど明確な結果は出せなかった。そのため、今回は筆者にとって明らかに前項焦点文・後項焦点文と解釈されるものを観察対象とし、全体焦点文については特に取り上げないことにする。

観察対象とした例文は、「新潮文庫の100冊」のうち、原文が日本語であるものから収集した。総収集数は326例で、うち、格関係が再現できるタイプのものが142例、再現できないタイプのものが184例である。これらを、のテストによって、前項焦点文、後項焦点文、明確に判別できないものの3種に分類した。結果は次の通りである。

表1. 格関係再現の可否と焦点位置

	前項焦点文	後項焦点文	判別不可	計
格関係が再現できるタイプ (うち、B項が時の成分であるもの)	17(0)	104(41)	21(6)	142(47)
格関係が再現できるタイプ	170	2	12	184

ここから、「AのがBだ」文のタイプと焦点の位置にはある傾向性が見られることがわかる。

3.1 格関係が再現できるタイプの焦点句の位置

格関係が再現できるタイプの「AのがBだ」文は、142例中の104例、7割強のものが先に挙げたテストを通り、後項焦点文と解釈された。

まず、142例中、B項が時を表す成分のものは47例で、このうち後項焦点文と解釈されたのは41例と9割近くにのぼっている。(18)(19)はその例である。

(18) 十二月三十一日の朝六時三十分茅野駅を出発して夏沢鉱泉まで雪道を歩きました。夏沢鉱泉についたのが午後四時。(『孤高の人』)

(19) 木場院長が、ここはちゃんとした畑になるまで蕎麦を播くとよい、と言い、少年達は蕎麦の種をまいた。播いたのが七月はじめであった。その蕎麦が育っていた。(『冬の旅』)

B項が時を表す成分である47例は、2例をのぞいて「～たのが[時の成分]」という形式をした文である。ほとんどは、過去に起こったことがらについてそれがいつであったかを思い出すような文で、後項焦点文と解釈される。

また、「～るのが[時の成分]」という形の残り2例は、ある動作がいつ完了するか、という時刻を推定する状況となっており、これも後項焦点文と解釈される。⁽²⁾(20)がその例である。

(20) 須磨から宝塚まで五十キロある、夏のいい状態のときでさえ足の達者な者で十四時間はかかる。六時に須磨を出て宝塚へつのが夜の八時だ。(『孤高の人』)

この結果から、B項が時を表す「AのがBだ」文は、事象Aが起こる/起こった時刻を探す、という解釈を受けやすいと言える。ただこの結果には、出典が小説であることも影響していると思われるので、今後さらに広いジャンルから例文を採集し、検討する必要がある。

B項が時を表す成分以外の文は95例あり、そのうちの63例、約3分の2のものが、明らかに後項焦点文と解釈される。

(21) 武帝の死と昭帝の即位とを報じて旁々当分の友好関係を (中略) 結ぶための平和の使節である。その使としてやって来たのが、図らずも李陵の故人・隴西の任立政等三人であった。(『李陵・山月記』)

(22) この会で吟子は、裁縫、お華といった習い物とともに、婦人の生理衛生の講義から、女性のあり方、果ては繻帯の巻き方まで、現代の婦女子として必要な知識のすべてを教えた。なかでも力を入れたのが「淑女」の意義と「純潔」の尊さであった。(『花埋み』)

このタイプの「AのがBだ」文が後項焦点文と解釈されやすいのは、「Aのが」までを述べた時点では、A節中の動詞が表す事象を構成するメンバー、あるいはその場面設定が、一部欠けた状態になっているためだと考えられる。(21)で言えば、「～が」まで述べたところでは、「やって来た」の主格名詞句、事象にとって特に必須度の高いメンバーがまだ述べられておらず、欠けた状態になっている。そこで、必要だが欠けている要素を問い、探すという形になるため、やって来たのがXだという前提が立ちやすいのであろう。

このように、このタイプの「AのがBだ」文は、そもそも構造的に後項焦点文としての解釈を受

けやすい文であると考えられる。

しかし、文脈・状況の影響を受けて、前項焦点文と解釈される場合も少なくない。今回の調査でも、97例中の17例は前項焦点文と判断される。次の(23)(24)がその例である。

(23)「かれって？」

突然作家は狂ったように笑いはじめ、口のなかの壁までほくにみせてベッドのうえで腕をばたばたさせた。

「さっきでいったのがかれよ」(『聖少女』)

(24)十九日昼過ぎ、針路北五十度東で、東京のはるか南を通過し、それより三日後の二十二日朝、「赤城」は単冠湾に入った。

南千島の国後島のすぐとなりの、細長い島が択捉島で、島のちょうどまん中、南側のところにあるのが、単冠湾である。(『山本五十六』)

このタイプの「AのがBだ」文が、どのような先行文脈、状況で前項焦点文と解釈されるのか、といった点については、今後検討が必要である。

3.2 格関係が再現できないタイプの焦点句の位置

このタイプの「AのがBだ」文は184例あったが、そのうち前項焦点文と解釈されるものが170例と圧倒的に多い。次の2例は前項焦点文の例である。

(25)先生は腎臓の病に就いて私の知らない事を多く知っていた。

「自分で病気に罹っているながら、気が付かないで平気であるのがあの病の特色です。」

(『こころ』)

(26)ただがむしゃらに山へ登ることだけが登山ではありませんよ。よく山を調べ、天候を調べたうえで、慎重に一步一步を頂上に向かってきざんでいくのが登山です。(『孤高の人』)

先に見たように、このタイプの「AのがBだ」文のBの名詞句は、A節の述語動詞とは格関係を持たず、その動詞が表す事象に直接の関わりを持たない。

そして、ほとんどの文は、Bの名詞句の前に「何だと思う？」といった質問をさしはさむことが難しく、前項焦点文と解釈される。これは、「AのがBだ」の「～が」まで述べた時点で、A節の動詞が表す事象についてはすでに必須項目があげられ、ひとつの事象として完結しているので、さらに問いをたてる必要はないためだと考えられる。また、A節で述べられていることからBの名詞(上の例では「特色」「登山」)の内容であり、すでに述べられた内容について、それが何であるのかを問う必要はあまりないからだとも言える。

4. おわりに

本稿では、「の」による節を主格名詞とする「AのがBだ」という形式の名詞述語文、中でもA節中の述語が動詞である文について、その構造と焦点句の位置について考察した。その結果、A節中の述語とB項に格関係が再現できるタイプの「AのがBだ」文は、構造的な理由によって、後項焦点文としての解釈を受けやすく、文脈中に置かれても後項焦点文と解釈される場合が多いことを示した。

ここで考察した文は、非常に限定した範囲での文であり、「AのがBだ」文全体、また「が」による名詞述語文、さらに「は」も含めた名詞述語文全体の中にどのように位置づけられるのかは、今後の課題である。

注

(1) 受動文の動作主、使役文の被使役者など、ヴォイスに関わる「に」格名詞句については、本稿では分析が及ばないため、考察対象外とする。

(2) 判定不可の6例は、日記の冒頭などに現れた文で、全体焦点文ではないかと考えられる。

ex. (八月×日) 岡山の内山下へ着いたのが九時頃。 (『放浪記』)

資料

芥川龍之介『羅生門・鼻』/阿川弘之『山本五十六』/有吉佐和子『華岡青洲の妻』/赤川次郎『女社長に乾杯!』/石川達三『青春の蹉跎』/井伏鱒二『黒い雨』/井上靖『あすなる物語』/井上ひさし『ブンとフン』/五木寛之『風に吹かれて』/池波正太郎『剣客商売』/遠藤周作『沈黙』/大岡昇平『野火』/開高健『パニック・裸の王様』/北杜夫『榆家の人びと』/倉橋由美子『聖少女』/小林秀雄『モーツァルト・無常という事』/沢木耕太郎『一瞬の夏』/志賀直哉『小僧の神様・城の崎にて』/島崎藤村『破戒』/司馬遼太郎『国盗り物語』/塩野七生『コンスタンティノーブルの陥落』/椎名誠『新橋烏森口青春篇』/曾野綾子『太郎物語』/太宰治『人間失格』/竹山道雄『ビルマの豎琴』/田辺聖子『新源氏物語』/立原正秋『冬の旅』/高野悦子『二十歳の原点』/壺井栄『二十四の瞳』/筒井康隆『エディプスの恋人』/夏目漱石『こころ』/中島敦『李陵・山月記』/新田次郎『孤高の人』/林芙美子『放浪記』/福永武彦『草の花』/藤原正彦『若き数学者のアメリカ』/堀辰雄『風立ちぬ・美しい村』/星新一『人民は弱し 官吏は強し』/松本清張『点と線』/宮沢賢治『銀河鉄道の夜』/三島由紀夫『金閣寺』/三木清『人生論ノート』/三浦哲郎『忍ぶ川』/水上勉『雁の寺・越前竹人形』/三浦綾子『塩狩峠』/宮本輝『錦繡』/村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』/森鷗外『山椒大夫・高瀬舟』/山本有三『路傍の石』/山本周五郎『さぶ』/吉行淳之介『砂の上の植物群』/渡辺淳一『花埋み』

以上、CD-ROM版『新潮文庫の100冊』新潮社1995より

参考文献

1. 天野みどり (1995 a) 「が」による倒置指定文 「特におすすめなのがこれです」という文について 『人文科学研究』88 新潟大学人文学部：左 1-21
2. 天野みどり (1995 b) 「後項焦点の「AがBだ」文」 『人文科学研究』89 新潟大学人文学部：左 1-24
3. 天野みどり (1996) 「後項焦点の名詞述語文 「は」と「が」の考察の基点」 『和光大学人文学部紀要』31：1-10
4. 天野みどり (1998) 「前提・焦点」構造からみた「は」と「が」の機能」 『日本語科学』3 国立国語研究所：67-84
5. 上林洋二 (1988) 「措定文と指定文 ハとガの一面」 『文藝言語研究・言語篇』14 筑波大学文藝言語学系：57-74
6. 菊池康人 (1997) 「が」の用法の概観」 『日本語文法：体型と方法』ひつじ書房：左 101-123
7. 熊本千明 (1989 a) 「日・英語の分裂文について」 『佐賀大学英文学研究 第17号』：11-34
8. 熊本千明 (1989 b) 「指定と同定 『…のが…だ』の解釈をめぐって」 大江三郎先生追悼論文集編集委員会 (編) 『英語学の視点』九州大学出版会：307-318
9. 新屋映子 (1994) 「意味構造から見た平叙文分類の試み」 『東京外国語大学日本語学科年報』15 東京外国語大学外国語学部日本語学科研究室：1-15
10. 砂川有里子 (1995) 「日本語における分裂文の機能と語順の原理」 仁田義雄編 『複文の研究(下)』くろしお出版：353-388
11. 砂川有里子 (1996) 「日本語コピュラ文の類型と機能 記述文と同定文」 『小泉保博士古希記念論文集 言語探求の領域』大学書林：261-273
12. 西山祐司 (1990) 「コピュラ文における名詞句の解釈をめぐって」 『文法と意味の間：国広哲弥教授還暦退官記念論文集』くろしお出版：133-148
13. 野田尚史 (1996) 『「は」と「が」』くろしお出版
14. 三上章 (1953) 『現代語法序説』刀江書院、1972 復刊、くろしお出版
15. 和気愛仁 (1996) 「に」の機能」 『筑波日本語研究』筑波大学 文芸・言語研究科 日本語学研究室：59-72